

川端康成『眠れる美女』論

——幻想空間のパラドックス——

上田 渡

一、

江口老人と六人の「眠れる美女」達との、五夜にわたる異常な夜の物語を描いたこの作品は、何らかの方法で「仮死のような昏睡に」陥れられた娘をあてがわれた江口老人が、その娘達の肉体の状態や無意識的な動作に触発されて、自分自身の過去の女性関係を追想したり、怪しく気味の悪い夢を見たりするという作品である。眠らされた娘は江口老人の幻想のための道具、あるいは装置として機能している「生きたおもちゃ」にすぎない。外界からの刺激をいっさい知覚しない存在として設定された娘が、江口の幻想を一層自由にし、過去の女達との印象的な場面の中へ容易に自己の存在を埋没させることも可能にしてくれる。娘達は江口の幻想の道具である故に、内面を持たない、人間ではない。当然江口を意識していないから、自分が江口にどういう影響をもたらしているかも知らない。つまり、女達と江口の間人間同志の関係は最初から存在していない。江口は女体を前に自己の孤独な行為を繰り返しているにすぎない。頑是無い

子供が無邪気に人形遊びするように、江口は「生きたおもちゃ」で悲しい人形遊びにふけている。しかし、そういう江口に不毛な幻想世界を提供したのは宿の女である。江口の幻想は、全て宿の女の提供したもの（「深紅のびろうどのかあてん」に囲まれた部屋・眠れる美女・白い錠剤等々）によって想起されている。一見自由に思える江口の数々の幻想も、実はこの宿の女によって仕組みられ、制限され、一定の方向付けがされている。「写実風な目と脚とをつけた」あやしい鳥の帯模様象徴される、どこか気味悪いうしろ姿をした宿の女は、江口を囲繞する空間の支配者として、空間を鳥瞰する眼と翼を持ち、またその空間内に舞い降りて、接待役として直截的に江口を導く脚を持った存在として位置付けることができるだろう。

そこで、手はじめにこの宿の女と江口の関係について少し詳細に追ってみようと思う。

二、

作品の冒頭文は次のようになっている。

たちの悪いいたづらはなさらなくて下さいませよ、眠っている女の子の口に指を入れようとなさったりすることもいけませんよ、と宿の女は江口老人に念を押した⁽¹⁾。

冒頭から宿の女の注意ではじまる。宿の女は江口に対して注意し警告する役割を担っている。江口はこの宿の女の注告に心情的には反発するが、結果的にはその注告に忠実である。例えばこの冒頭の「女の子の口に指を入れようとなさったりすることはいけませんよ」という注意は、江口の意識の中では常に破ろうとする方向にあるが、いつも寸然のところであやうく中止され、結果的には守られることとなる。興味をひくのは、江口が娘達の肉体を淫靡な眼差しで微細に観察する描写の中で、女の子の口（唇・歯・舌を含む）への言及が各夜ごとにあり、確認できただけで二十数度に及ぶ

ことである。最初の夜は、「唇も唇からのぞく歯もうひうひしく光っている。」という文章や、「きれいに合わせた娘の唇から江口老人は目をそらせて、娘のまつ毛と眉をながめながら、きむすめであろうと信じると疑わなかった」という文章でわかるように、その娘の処女性を確信し、宿の女の注意に従うかたちで、けっして唇に指で触れようとはしない。処女性に対する驚きとおのきが江口にあったのか、不可侵的な処女性に直面して、自己の老醜を一層思い知らされたのか、いずれにしろ、江口が娘の唇に強い興味を示しながらも、触れるまでにいたらなかった事実にはない。第二夜では、濃い口紅をつけ、男を誘うような身動きをする娘の行動に驚いて、ゆり起こそうとして娘のあごをゆさぶった。その時、「江口老人の手先きに力が加わったのか、娘はそれをのがれるように枕へ顔を伏せてゆくと、唇のはしが少し開いて、江口の人差指の爪先きが娘の歯のひとつふたつにふれた。」ここで初めて唇に指が触れるが、それは自分の意志ではなく、娘の行動に伴う偶然の結果であったことが強調されている。そして次のような文章が後に続いている。

江口の指にふれた娘の歯は、指にほんの少しねばりつくものにぬれているようだった。老人の人差指は娘の歯ならばをさぐって、唇のあいだをたどっていった。二度三度行きつもとどりつした。唇のそとがはのかわき気味だったのに、なかのしめりが出てきてなめらかなになった。右の方に一本八重歯があった。江口は親指を加えてその八重歯をつまんでみた。それから歯のおくに指を入れてみようとしたが、娘のうへしたの歯は眠りながらもかたく合はさっていてひらかななかった。

江口の行為は娘の固く閉じた歯によって遮られた。歯の奥に指を入れることが何を意味しているのかは、その後の江口の行為と対照させてみることで象徴的に解釈できる。つまり江口は娘に性的行為を試みるが、いわゆる「むすめのしるし」に遮られて、その行為を断念せざるを得なくなる。歯の奥に指を入れることの中絶は、この性的行為の失敗を巧

みに暗示している。作品成立時期⁽²⁾(昭和三十五年)や作者の文学的資質から考えても、裸体で横たはる女体の下半身を露骨に描写することが回避されていることは首肯できるし、上半身だけでも十分にエロスを表現するだけの文章力が川端にはある。第三夜以降も娘達の唇への執着を示す文章が続くが、△唇∥女性器▽という暗示を考慮すると、その文章の淫蕩なイメージは極限に達している。しかし、第三夜以降も、江口は娘の唇に接吻したり、娘の八重歯をつまんでみたりはするが、宿の女の言い付けを守って歯の奥に指を入れることはとうとうしなかった。それは江口が他の老人と違って性的機能は衰えていないのに、一度も娘達との性交渉をもたなかったことと相俟って、江口が宿の女の与えた禁制に終始忠実であったことの証明であると言える。

宿の女と江口の関係は、この禁制を遵守するという点からみても、△支配——非支配▽の関係にある。宿の女の与えた空間の中で、宿の女の与えた「眠れる美女」というおもちゃを抱き、宿の女の決めたルールに従って遊んでいる江口は、宿の女という母の庇護のもと、無邪気に遊んでいる幼な子の姿に比せられる。江口がある種の胎内回帰的幻想を求めてこの宿に来る時、宿の女は江口の母として君臨し、江口の要求に答えるかたちで、江口を偽物の母性で包んでいく。例えば、江口が娘と一緒にいる時に突然乳呑児の乳くさい匂いがして来たという幻覚も、江口が乳呑児にまで退行したことの暗示か、あるいは、娘の肉体自体が作品空間全体を支配する宿の女の「乳房」の役割を果たしているのか判断に迷うが、いずれにしろ△母と子▽という関係の中で解釈するのが妥当であろう。

老人は夜半の悪夢なども忘れて、娘が可愛くてしかたがないようになる、自分がこの娘から可愛がられているような幼ささえ心に流れた。娘の胸をさぐって、そっと掌のなかに入れた。それは江口をみごもる前の母の乳房であるかのような、ふしぎな感触がひらめいた。

右の文章には、娘との添寝により幼子にもどっていく江口の姿があり、そして娘の乳房に触れながら、娘に自分をみ

ごもる以前の母を感じ、自己の存在を未生以前にまで溯行させようとする江口の姿を見ることが出来る。幻想のための道具にすぎない娘の肉体に自分の母を感じることは、その娘の肉体を背後であやつる宿の女の仕業であり、江口が完全に宿の女の虜になってしまったことの証左である。宿の女の与えた眠り薬を飲んだ江口が、四本あしの女にからみつかれた夢を見たり、病院の産室で自分の娘が畸形児を産み、その娘がその畸形児を切りきざんでいる場面を夢に見たことは、全て宿の女の策略と考えられる。江口の夢の中にまで宿の女が入り込んで来ている。四本足の女や畸形児を「畸形の逸楽」をもとめてきた江口への罰として夢の中に登場させたのは宿の女である。複製版の川合玉堂の絵が象徴しているように、この空間は全て偽物であり畸形である。江口が追い求める母性も宿の女によって偽物で畸形の母性として提供される。江口はそれが偽物であることは最初から承知している。偽物でも畸形でも自分の老醜を一瞬でも忘れさせてくれればそれで良い。例え悪魔に魂を売り渡しても、忘我的瞬間を獲得できるならかまわない。それくらいの覚悟は、当然江口に備わっている。死期の近い老人にとって、生の至福感への強い願望は、押さえきれない焦燥感となってしまう。一度でやめようと思いながらも、その後も何度も宿に通い続ける江口の名状しがたい悲哀がそこにあった。

三、

江口が娘達と一夜を過ごす時に、その娘達の匂いや動作又は肉体的特徴から、自分の過去の女性遍歴を回想することの意味を少し探ってみたい。

第一夜では「乳呑児の匂い」から、結婚後なじみの芸者から洋服が乳くさいことで叱責されたことと、結婚前愛人の乳首を吸いすぎて薄い血が出てきてしまったことを思い出す。そしてその愛人と京都へ駈落ちしたことや、結局他家へ嫁いだその娘とその後偶然出会った時、娘の負ぶっていた赤ん坊を自分の子ではないかと疑う。第二夜では娘の肌の匂

いから、自分の末娘の幸福な結婚生活を想起する。やがて「子供を産んだあとの末娘はからだのなかまで洗ったように肌が澄み、そして人にも落ちつきができていた。」という述懐を持つに到る。第三夜では「死んだように眠る」娘から神戸の人妻との不倫を思い出す。結果として江口はその人妻と別れるのだが、その原因としては、人妻が自分の夫との関係により妊娠したためではないかという想像が、娘と寝ている今になって不意に浮かぶ。やがてそれは江口の中で動かし難い事実となっていく。夫の三人目の子供を宿した人妻が江口のもとを去った時、江口は心から人妻を祝福し、安らぎのある心持ちになる。江口は正当に夫の子供を宿した人妻を思うと、不倫の罪悪感が洗い流されるように思われた。第四夜には具体的な思い出は出てこない。江口には夢も見ることなくぐっすり寝たと宿の女に告げる。最後の第五夜では、思い出は全て自分の母につながるものとなる。

最初の女は「母だ。」と江口老人にひらめいた。「母よりほかにいないじゃないか。」まったく思ひもかけない答えが浮かび出た。「母が自分の女だって？」しかも六十七歳にもなった今、二人のはだかの娘のあひだに横たはって、はじめてその真実が不意に胸の底のどこから湧いて来た。

という文章からもわかるように、自分の最初の性的対象を母だとする。幾度もその性遍歴の回想の行きついた先は自分を産んだ母であった。第一夜から第五夜までの回想場面の流れを追ってみると、不思議に「母と子」Vというイメージで関連していることに気付く。第一夜の愛人も第二夜の末娘も第三夜の神戸の人妻も妊娠及び出産によって江口のもとから去っていく。かつて心から愛した女達が、人間社会の秩序ある法則に従い、夫との間に子供をもうけ、江口の前から姿を消す。末娘に対する江口の愛は「父親としてはなみはづれた心理」であり、近親相姦的であるともいえる。江口の愛は秩序ある社会では受け入れられない背徳的な愛であり、その愛は当然の如く現実社会では否定され、江口は生の孤独の中でもがき苦しむこととなる。現実的には江口も三人の娘の父親として、老いた妻の夫として平凡な生活を送って

いるはずである。しかし三人の娘は嫁ぎ、長年つれ添った妻との間にはすでに愛と呼べるものはない。江口の家庭人としての幸福はこの作品には描かれていない。考えてみれば、幸福な老後を過ごす江口がこんな宿に何度も訪れてくることはないはずである。恋愛というものが本質的に反社会的行為であると定義されるなら、江口が求めた愛も背德的である故に、真実の愛に近かったのかもしれない。いくつもの回想の果てに自分を産んだ母との近親相姦に辿り着いた江口は、ある意味で愛の本質に行き着いたといえる。しかし、その母も江口の前から姿を消してしまふ。最初の女が母であると思つた瞬間、江口の回想はその母の臨終場面へと向っていく。

臨終場面の解釈はあとで述べるつもりだが、この江口の全ての回想が、江口のもとを去っていった女のことであることは、けつして偶然ではない。全ては宿の女の与えた「眠れる美女」達からの想起であることを考えれば、江口の過去回想までも宿の女の仕掛けのひとつであることは明白であろう。思い出に浸るたびに江口の孤独感が増し、一步一步確実に現実的な死に接近していく江口がそこにいる。そのことだけは確認しておいて、次に移ることにする。

四、

ここで角度を変えて、六人の「眠れる美女」の性格と役割について整理してみようと思う。この六人の娘達は江口の意志とは無関係に宿の女から与えられたものである。よってそこに宿の女の意図や仕掛けを見ることができはずである。宿の女が娘達をつかつて江口をどのよう誘惑し、操っていかうとしたかがわかるはずである。

第一夜の娘は、導入的に江口を魅了する役割を担っていた。江口が何度もこの宿に足を運ぶように仕向けるために、娘達の中でも最高に素晴らしい娘でなくてはならなかった。若く美しい娘であることは勿論のこと、初めて来た江口に合せて、娘も初初しく処女の恥らいを持っていることが要求された。その意味において第一夜の娘は理想的であった。

見事に江口の心を捉えた。江口を母のような優しさで包み込んだ。そして前述したように、江口は母の乳房をさわりながら眠る幼子に帰っていった。

第二夜の娘は、その魅力で江口を翻弄する役割を担っていた。より深く江口をこの母胎回帰的な幻想世界に惑溺させるための娘であった。娘は江口にとって「若い妖婦」であり、「神話の娘」であった。娘を抱いて「ほとんど無心の恍惚」の境地に入り込んでしまった江口は、もう娘のなすがままであった。娘はまず寝言の中で「お母さん。」と叫ぶ、そして「あれ、あれ、行ってしまふの？ゆるして、ゆるして……。」と続ける。宿の女の操り人形として「妖術をかけられている娘」が、夢の中で自分の母を呼ぶであろうか。娘の素性について一際明らかにされない原則のもとで、娘みずからその原則を破るようなことは考えられない。では何故母が去っていく夢を見たのであろうか。それは娘のその後と行動と結び付けることにより明らかになる。

(娘は)両手を胸の前に折りまげて指を組みあせた。それが江口老人の胸にふれた。合掌の形ではないが、祈りの形のようなだった。やわらかい祈りのようだった。老人は娘が指を組んだ手を自分の両の手のひらのなかにつつんだ。そうするうちに老人自身もなにかを祈るような思いになって目をつぶった。

母が去ったあとで娘は祈りの形に指を組む、そして娘は翌朝「しゃくりあげてはげしく泣く」、その声で江口は目覚める。つまり、この△母との別離▽△祈り▽△号泣▽という娘の一連の行動は、実は江口に自分の母を想起させるために綿密に仕組まれた仕掛けであった。「その五」で江口が到達する母の臨終場面を巧みに暗示する娘の行動であった。母と死別し、鎮魂の祈りを捧げ、ありし日の母を想って号泣する娘の悲しみは、そのまま江口の記憶に結び付いていく。娘の祈る手を包んで自分もなにか祈るような想いになっていく江口は、クライマックスの母の臨終場面へと着実に近づいているといえる。

第三夜の娘は、十六歳の見習いの小さな子であった。余りに幼く未熟なため前の二人のような性的対象としての誘惑感はうすい。しかし、「もっと血のさわぐ悪が胸にゆらめくようだった。」として、性的対象を超えた対象として考えられている。江口は娘が余りに若いため、その娘の生殺与奪の権利を全て自分が握っているのだという気持を持ってしまふ。「娘の首をしめることも、口と鼻をおさえて息をとめることも、多分やさしそうである。」という殺意の表明がそれを明示している。江口の興味の方向が単なる性的願望から殺人をも含むもっと根源的なものに向っていくのがわかる。「その五」における黒い娘の死という問題とも微妙に絡んでいると言える。

第四夜は、まず宿の女が直接江口を殺人に誘う。「もし娘の首を絞め殺そうとなさるのも、赤子の手をねじるようなもの」だと女は言い、「おひとりですべて自殺なさるのがおさびしい時にはどうぞ。」と言う。江口も与えられた大柄の娘に添寝しながら、「さっき家の女が『締め殺す』と言ったが、それを思い出して、そんな誘惑におののくようなのは、娘のはだのせいだった。もし絞めたらこの娘のからだはどんな匂いを放つだろうか。」などと思い、宿の女の導くまま殺人への可能性を示す。季節も秋から冬にかわり、いよいよ第五夜を迎えるための序章的段階としてこの第四夜を位置付けることができよう。

第五夜には、黒い娘と白い娘の二人の娘が登場する。黒い娘は野蛮で「いのちそのもの」であり、江口に「生の魔力」をささずけてくれそうな娘であった。白い娘はあまい匂いのする鼻筋の美しい娘であった。この二人の娘の役割を探るために、作品の中心的回想場面である母の臨終場面について考えてみたい。

「由夫、由夫……。」と母が切れ切れに呼んだ。江口はすぐに察して母のあえぐ胸をやわらかくなでたとたんに、母は多量の血を吐いた。血は鼻からもぶくぶくあふれた。息が絶えた。血は枕もとのガアゼや手拭でふきまきれなかつた。

「由夫、お前の襦袢の袖で拭け。」と父は言って、「看護婦さん、看護婦さん、洗面器と水……。うん、そうだ、新しい枕と、寝間着と、それから敷布も……。」

ここで問題になるのは、江口が胸をなでた瞬間に母が多量吐血したという事実である。勿論、母は結核という不治の病であったからいずれは死ぬであろうが、自分が胸をなでた瞬間母が絶命した時、当時十七歳の江口少年には、自分が母を殺したのではないかという罪悪感が芽生えたのではないだろうか。「母親殺し」という罪悪が、それ以後の江口の深層心理の中に強く刻みつけられたのではないか。第二夜の娘の夢がこの臨終場面を暗示していることは前述したが、その中で娘が「ゆるして、ゆるして……。」と叫ぶのは、この江口の「母親殺し」の罪悪感のためである。性的回想が母に還元されていき、「最初の女は母だ」という結論に到達した時、それは母の死に直結していく。それは、「江口老人が『最初の女は母だ。』などと思へば、あのような母の死にざまが浮かんで来るのは当然だった。」という文章に端的に表れている。江口は母と实际的に近親相姦的な関係を持ったわけではなく、死の床にあった母の胸をなでた時の江口の心理的狀態が「母を犯した」ことと同義であるということだ。「右と左との娘のちぶさにたなごころをおいた。」時、江口は母の胸をなでたことを思いだす。胸にふれる行為が娘と母を結びつけている。十七歳の少年江口が死に瀕した母の喘ぐ胸をやわらかくなでた時、母に最初の女を感じ、心の中で母を犯した。その瞬間母は吐血し死んでしまった。江口の最初の性交渉は相手を死にいらしめた。江口の中で性的体験と死が一連の行為のように認識された。性的倒酔の極地に死が存在しているという認識が、この母の臨終場面の回想とともに今現在の江口の心に忽然と甦ってきたのである。

実は、黒い娘の死は、この江口の認識と無関係ではない。結論からいうと、黒い娘は江口によって死にいらしめられたということである。黒い娘に対する江口の行動を追ってみると、まず江口はポケットからハンカチを出して娘の額や腋の下を拭き、口紅で赤く染った唇を拭く。江口はこの黒い娘にだけこのような行動をとったが、これはその拭くと

いう行為だけを捉えてみると、江口が母の臨終の時にとった行為と同じである。あふれた多量の吐血を必死に拭き取っていた江口少年の姿と黒い娘の体や脣を拭いている江口老人の姿は、その状況や感情を抜きにして考えれば、二重映しとしてとらえられる。つまり黒い娘に対する江口の行為は、母の臨終場面を想起させる予兆的行為として把握できるのである。この臨終場面の想起は、江口に「母親殺し」こそ性の極北であることを自覚させた。黒い娘の死がこの臨終場面のおこることを考慮すれば、黒い娘は母の身がわりとして江口に殺されたと考えられる。「いのちそのもの」である黒い娘の「生の魔力」を利用して、江口は母を甦らせ、自分も幼子になってその乳房をまさぐりながらやすらかに眠ることを願った。そのために無意識の中で黒い娘を殺してしまった。江口は「なにもしない。」といって否定しているが、確かに江口が殺したのである。では何故それを認めないのかというと、それは宿の女の策略に嵌められたからであり、全ては宿の女の計画どおりに進んでいったに過ぎないのである。宿の女はこの後、江口にもう一度薬を与える。第四夜の時、薬をもう一度欲しいと頼む江口に、「とんでもない。」と強い調子で否定したのに、今回はその薬を与えたということは、やはり江口はこの薬を飲んで死んでしまうのではなからうか。⁽³⁾ 黒い娘を殺すことで江口の目的は達せられ、その代償として江口は死に到るのである。福良老人の死体がつれ去られ、今また黒い娘が運ばれようとしているあやしげな温泉宿に、江口もまもなく運び込まれる運命にあるのである。余談だが、第四夜の最後に「女は江口に娘になにかしたかと疑ったのか、あわてて立つと、隣室へは行って行った。」とあるのは、江口が娘を殺してしまったのではないかと宿の女が思ったからに違いない。

ところで白い娘はどういう役割を果しているかということを書いておくと、江口自身が白い娘を抱きながら「一生の最後の女か。」と思うように、まさしく「最後の女」として宿の女が与えた娘であった。第五夜にいたって何故二人の娘を江口にあてがったのかということの意味が、黒い娘の死によって明らかになった。「帰る。」という江口をひきと

め、死の眠りにつかせるためには、やはり白い娘の存在は不可欠であった。白い娘という「最後の女」の腕の中で、江口は死の眠りにつくのである。死ぬことが宿の女によって予定されていた黒い娘の代替として、白い娘の存在は意味があった。白い娘の裸体の輝く美しさに惹かれて、江口は二度目の薬を飲み、死というこの上ない深い眠りについてしまうのである。

五

作品全体を宿の女の策謀の実践と、その畏にまんまと嵌まった江口老人の物語として読むという視点に立って考えてきたが、江口が内面的に抵抗し、もがけばもがく程宿の女の権謀術数に翻弄されていく姿に、「老い」というものの悲哀と寂寥を感じずにはいられない。老人故に若々しい生命感をなりふりかまわず求めてやまない江口の姿のあわれさは、ゆるぎないリアリティをもって読者にせまってくる。今、あえてこのリアリティだけに目を向ければ、宿の女も眠れる美女たちも全てが江口老人の幻想の産物のようにも思えてくる。ひとりの老醜に悩む老人が、催眠剤を服用することで幻覚・幻想の世界に現実の自己を開放し、自らが設定した宿の女という神（あるいは悪魔）に自分自身が召されていくということ希求しているとも考えられるのである。絶対的な優位性に守られている宿の女のある種の神性は、従属する下僕江口によって、より一層高められ、いつしか物語の創造主である現実的存在としての江口をも包摂していこうとしているのである。宿という空間自体が実は江口の作り出したひとつの幻想であり、その幻想の支配者として宿の女が君臨している。現実の江口は宿の女の支配する幻想空間の中に、自己の分身ともいえる従属的な江口という存在を設定する。そして幻想空間内で黒い娘を殺し、宿の女に催眠剤によって殺されようとしている江口の中に、現実の江口を埋没させることで、現実世界での圧倒的な死の恐怖から逃れようとしている。偽物の母である宿の女は、黒い娘の死によっ

て、本物の母として江口の前に顕現する。つまり、幻想の核である母の臨終場面の回想に到達した江口は、その母を死から甦らせるために黒い娘を殺した。幻想の中で母は蘇生し、宿の女として顕現する。勿論宿の女の最後の道具である白い娘も本物の母の形姿を反映していると考えられるが、ともかくも、江口は幻想の中で本物の母と再会し、本物の母の胸でやすらかな眠りにつこうとしている。幻想が現実を凌駕し、本能が理性を超越した時、江口は戦慄すべき死の恐怖から解放され、やすらかな眠りを手にすることができるのである。少なくとも江口はそう信じていたのである。しかし、残念ながら、いや当然のこととして、作品はその解答を保留にしたまま終わっているのである——もしかすると死ぬ瞬間、江口の幻想は全て毀れ、現実的な死の恐怖に苦悶するかもしれないという危険性を孕みながら——。

幻想を産みだした主体が自己の幻想世界に入り込むことに成功した瞬間、その主体を喪失した幻想世界もまた消失してしまう。私はここに幻想のパドラックスとも言うべき逆説的な作品構造を見るのである。

注

(1)、本文引用は全て新潮社版川端康成全集第十八巻（全三十五巻補巻二）に拠ったが、旧漢字・旧仮名づかいは新漢字・現代仮名づかいに改めた。

(2)、「新潮」昭和三十五年一月号から昭和三十六年十一月号まで十七回にわたって発表されている。

(3)、鶴田欣也氏は『眠れる美女』（『川端康成の芸術——純粹と救済——』明治書院昭和五十六年十一月）の中で、

「——実際、最後に江口が余分の眠り薬を手に入れ、家の女からもより長い眠りの保証を得ることで、彼の底深く秘めてきた死への欲望をやっと実現する淵に達したのではないだろうか。」

として、江口が最後に死んでいくことを予見している。